

堂ヶ谷経塚出土の腰刀に関する予察

大竹 弘高

要旨 平安時代末期頃の短刀は、伝世品を含め、類例がほとんど知られていない。そのため、堂ヶ谷遺跡のように、一つの遺跡からこれほどの短刀が出土することは稀なことであり、平安時代の刀剣類を研究する上でも有効な資料になり得ることは間違いないであろう。本稿では、堂ヶ谷経塚出土の腰刀を刀身の長さ、切先の形状によって4種類に分類することを試みた。鎌倉時代の伝世品でも定尺より長いものや短いものが知られ、堂ヶ谷経塚出土の腰刀も同じような傾向を示す事と、切先の形状の違いは使用上の機能の違いによるものではないかという事を推測した。また、棟角より刃面の幅が狭いものが複数認められることから、研減りによる形状の変化の可能性を指摘した。ただし、曲げられた状態のものもあることから、埋納のために加工された腰刀も含まれる可能性もあり、茎や画の形状も大多数の腰刀とは異なることから、含まれることから、これらの異質な腰刀類の類例を探り、さらに研究が必要であろう。

キーワード：腰刀、刀身の長さ、切先の形状、分類、刃面と棟面の幅の差

1 はじめに

現在馴染みのある日本刀の形状は、太刀に関しては平安時代中期～末期頃の類例が知られる事から、同時期には定着していたと考えられる。一方、短刀に関しては平安時代の伝世品がほとんど存在しないことから、その成立を含めて判然としない部分が多い。しかし、古代、中世の遺跡に伴って短刀が出土する例も多く、文献にも刀剣類の記述が多数存在することから、短刀が平安時代には既に存在していたことは明らかである。ただし、出土する短刀は原型をとどめないものが多く、これまで刀身の形状や外装に関して具体的な考察はされてこなかった。堂ヶ谷経塚からは曲げられた太刀と約63振りの腰刀が出土しており、一つの遺跡からこれほど多くの短刀が出土する例はない。そのため、経塚の研究だけではなく、平安時代の刀剣を研究する上でも有効な資料となるであろう。堂ヶ谷経塚出土の腰刀については経塚埋納の場を繰り返し清めるために使用されたと考察されたが、腰刀自体に関してはまだ不明の部分も多い。出土した腰刀は大小様々なものが混在しており、曲げられているものも含まれているため、太刀と同様に埋納のために加工を施されたものなのか、それとも実用品であったのか、その評価は難しい。そのため、平安時代の刀剣類を研究する上でも、堂ヶ谷経塚より出土した腰刀の性格の把握が必要であろう。本稿では、研究の中途の段階として、腰刀の刀身の長

さと切先の形状によって分類を行い、埋められた腰刀の性格について考察していきたい。

2 腰刀の分類

伝世品の多く残る鎌倉時代の短刀は、刀身部の長さが24cm前後を定寸としているが、24cmより短いものや長いものも多数存在する。鎌倉中期頃の「栗田口吉光」、「来国俊」、「新藤五国光」といった刀工の現存する短刀の刀身の長さを比較して、24cm～26cmのものが多く残っているが、短いもので21cm台の長さのもの、長いもので29cm台のものがあることが指摘されている（渡辺2009）。

堂ヶ谷経塚出土の腰刀も大小様々あることから、鎌倉時代の短刀と同様の傾向を示すものと思われる。ただし、鎌倉時代の短刀は21cm台から29cm台のものまであるが、伝世品では20cm未満の類例が知られていない。それに対して、堂ヶ谷経塚出土の腰刀には20cm未満のものも含まれていることから、20cm未満のものは短刀以外の機能を持つ可能性が考えられる。

長さ以外の特徴としては切先の形状に関して、フクラのつくものとフクラがつかず鋭くなるものが確認できた。切先の形状の違いは、武器として使用する上での機能の違いによるのではないかと推測できる。

以上の2点から、刀身の長さ、切先の形状を分類項目として設定した。まず、刀身の長さによって、2つ

に分類する。刀身の長さが20cm未満のものをA類、20cm以上のものをB類として大きく2つに分類した。さらにA類とB類の中で、切先の形状の違いによって分類項目を設けて細分した。切先が細くならずにつく形状のものをⅠ類、腰元の幅から切先へ行くに従って細くなり、フクラのつかない形状のものをⅡ類とした。分類の対象とする資料は腰元から切先まで残存しているもの、切先が欠損していても、残存部分からおおよそその全長が推定できるものとした。

まずAⅠ類であるが、長さが20cm未満で切先が細くならず、フクラつく形状のもので、全体の中では7点がこの分類に相当する(図1-1~4)。16cm台~17cm台が4点あり、19cm台が2点ある。16cm台~17cm台のものは、図1-1のように刀身の幅が狭く、フクラのつくものと、図1-2のように刀身の幅が広く、フクラのつくものの2類ある。19cm台は3点あり、そのうち2点が、図1-3のように茎が細長いのにに対して、刀身の幅が広く、切先も大きいという特徴的な形状を呈しており、他の腰刀に比べ、やや不整形である。それ以外では図1-4のように斜面で、茎尻が刃側へ上がつて、やや角張った栗尻であり、こちらも他の腰刀にはあまり見られない特徴的な形状である。

AⅡ類は4点あり、図1-5、6がこの分類の特徴的な資料として挙げられる。13cm台が2点あり、18cm台と19cm台がそれぞれ1点ずつある。13cm台の2点と18cm台の1点は、刀身の幅が狭く、切先もフクラが枯れて、AⅠ類を鋭くしたような形状を呈する。ただし、13cm台の2点は他の資料と比べて短く、茎の長さを含めても他の資料より小型である。19cm台の図1-6は、細身でフクラが枯れ、刀身に大きく反りがつく特徴的な形状で、他の腰刀には見られない。

次にB類であるが、BⅠ類は20点がこの分類に相当し、図2-7~12が主な資料として挙げられる。多くは図2-7、10、12のように、刀身の幅が広く、切先に至るまで刀身に幅がほぼ変わらず、切先もフクラのつく形状を呈している。その中でも図2-8のように撫画になり、茎が棟側に反る形状のもの、図2-9、11のように茎尻の形状が他の資料とは変化するものなど異質なものが少数存在する。

BⅡ類は図2-13~22までが、この分類に相当する。図2-13、15のように概ね刀身の腰元の幅に比べて切先付近の幅が狭くなり、フクラが枯れる形状を呈している。その中で、図2-18のように切先で若干の反りが認められるものや、図2-22のように斜面で、茎尻

が刃側に上がつて切る形状のものなど、形状に変化のあるものが少数含まれる。

3 分類の検討

表1は堂ヶ谷出土腰刀の刀身の長さの傾向を捉えるために作成したものである。1cm単位で統計を出したものであるが、この表で見ると、23cm~25cmの数量が多いことが窺える。表2は鎌倉時代の中期から末期にかけての刀工の現存作を長さ別に表した表であるが、このようでも23cm~25cmの資料が最も多いことが分かる。時代が異なるが、前時代の平安時代でも同様に大小様々な刀が存在したことを表すものと捉えられる。しかし、20cm未満のものはあまり類例が知られていないため、この点で相違する。

表1 長さ別の合計数

刀身長	本数	刀身長	本数
13cm台	2	20cm台	2
16cm台	2	21cm台	6
17cm台	2	22cm台	4
18cm台	1	23cm台	8
19cm台	4	24cm台	7
		25cm台	7
		26cm台	4
		27cm台	3
		28cm台	1
		29cm台	1

表2 伝世品の長さ別の比較(註1)

刀身長	刀工名		
	栗田口吉光	来国俊	新藤五国光
21cm台	3	2	
22cm台	4	5	
23cm台	5	6	6
24cm台	3	15	12
25cm台	3	9	8
26cm台	3	3	3
27cm台	1	3	1
28cm台		1	1
29cm台	1		
30cm台	1		

写真1、2はそれぞれ平安時代末期と鎌倉時代初期の短刀であるが、どちらも反りが無い形状を呈しており、形状については一部を除き、堂ヶ谷経塚で出土した多くの腰刀と大きな差異は認められない。表3は対象とした54点の腰刀の分類別、刀身の長さ順に並べた表である。A類とB類を比較してみると、刀身部の形状がやや異なる。A類では、17cm台~19cm台のもの(図1-3、4、6、7)に、茎が細長いのにに対して刀身

表3 分類表

大分類	小分類	報告書 図版番号	図版番号	刀身長	刀身幅	棟幅	棟画	刃画	備考			
									反り	切先の形状	画の形状	茎の形状
A類	I類	47		16.0	2.0	0.6	0.2	0.2				
		176	1	16.2	1.7	0.5	0.2	0.2				
		45	2	17.5	2.8	0.5	0.4	0.6				
		46		17.5	2.3	0.4	0.3	0.6				
		64	3	19.2	2.3	0.5	0.4	0.5				
		86	4	19.2	2.5	0.6	0.4	0.6			斜画	
		88		19.4	2.6	0.5	0.1	0.4				
	II類	43	5	13.6	2.0	0.4	0.5	0.2		フクラ枯れる		
		44		13.6	2.0	0.3	0.4	0.2		フクラ枯れる		
		51		18.0	2.0	0.5	0.4	0.2	先反り	フクラ枯れる		
		52	6	(19.5)	2.2	0.5	0.4	0.4	先反り	フクラ枯れる		
B類	I類	87		20.1	2.6	0.4	0.3	0.5				
		63		21.0	2.5	0.6	0.5	0.4				
		178		(21.2)	2.6	0.5	0.4	0.4				
		177	7	21.4	3.0	0.6	0.4	0.5				
		91		(21.5)	2.7	0.5	0.4	0.5				
		90	8	22.7	2.9	0.5	0.6	0.3			撫画	茎尻上がる
		92		23.2	3.0	0.6	0.4	0.3				
		203		23.4	3.4	0.8	0.3	0.7				
		89		23.9	2.3	0.5	0.4	0.1				
		71		(24.2)	3.1	0.7	0.6	0.4				
		68	9	(24.3)	2.8	0.5	0.3	0.5				
		78		(25.0)	2.8	0.4	0.4	0.5				
		180	10	(25.1)	2.8	0.7	0.3	0.2				
		57		(25.9)	2.8	0.5	0.2	0.5				
		77	11	(25.9)	2.6	0.5	0.5	0.5				
		59		(26.5)	3.0	0.6	0.4	0.4				
		69		(26.6)	3.1	0.7	0.6	0.6				
		182	12	28.2	3.3	0.5	0.4	0.6				
		181		29.4	3.1	0.7	(0.2)	0.6				
	II類	60	13	20.5	2.1	0.4	0.4	0.1		フクラ枯れる		
		62	14	21.0	2.6	0.5	0.6	0.3		フクラ枯れる		茎尻上がる
		61		21.2	2.4	0.5	0.6	0.4		フクラ枯れる		
		65	15	22.6	2.4	0.4	0.4	0.5		フクラ枯れる		
		73		(22.9)	2.7	0.6	0.3	0.3		フクラ枯れる		
		179	16	23.2	2.9	0.5	0.4	0.2		フクラ枯れる		
		55		(23.4)	2.3	0.5	0.4	0.6		フクラ枯れる		
		75		23.4	2.7	0.5	0.4	0.5		フクラ枯れる		
		66	17	(23.6)	2.4	0.4	0.6	0.2		フクラ枯れる		
		56	18	23.8	2.4	0.5	0.3	0.2	先反り	フクラ枯れる		
		70	19	(24.3)	2.5	0.5	0.8	0.3		フクラ枯れる		
		53		(24.4)	2.9	0.6	0.8	0.6	先反り	フクラ枯れる		
		54	20	(24.4)	2.4	0.6	0.6	0.3		フクラ枯れる		茎尻上がる
		58		24.6	2.6	0.6	0.5	0.6	先反り	フクラ枯れる		
		79	21	(24.9)	3.0	0.6	0.4	0.5	先反り	フクラ枯れる		
		72		25.5	2.7	0.7	0.4	0.4		フクラ枯れる		
		84		(25.6)	2.9	0.5	0.5	0.6		フクラ枯れる		
		80		(25.8)	2.8	0.5	(0.4)	(0.4)		フクラ枯れる		
		81		26.0	2.8	0.5	0.5	0.4		フクラ枯れる		
		83		26.7	2.9	0.5	0.5	0.7		フクラ枯れる		
		74		(27.0)	2.7	0.5	0.5	0.5		フクラ枯れる	斜画	
		82		(27.0)	3.2	0.6	0.3	0.5		フクラ枯れる		
		85		27.8	2.8	0.4	0.6	0.4		フクラ枯れる		

が幅広く短いもの（図1-3）や、大きく反りがつくもの（図1-6）など、B類には見られない形状の腰刀が存在する。また、13cm台のもの（図1-5）は刀身だけではなく、全体的に小型であり、差し添えの刀としての刀というよりは、刀子もしくは護身用の小さ刀といった機能が想定できるのではないだろうか。19cm台の図1-3に見られる形状は、B類や他のA類に比べ、不整形である点は先ほど述べた通りである。腰刀は武士だけではなく、庶民の護身用としても用いられており、包丁の登場までは日常雑器としても使用されていた。そのため、図3-3のような腰刀はそういった日常雑器である可能性がある。ただし、切先が少し曲げられているため、太刀と同じようななまぐらの腰刀である可能性もあり、現時点での判断は難しく、今後の研究課題の一つである。

近藤好和氏は太刀の「切る」という機能に対して、腰刀は「突く、刺す」という使用上の機能が設定されているが、文献や絵画資料から、戦場において首を掻き切るといった目的にも使用されていたと述べている。また、伝世品には反りのない短刀が多く存在しているが、絵巻物などには柄まで反りのついた腰刀が描かれているものもあり、使用の目的に合わせて様々な形態が存在したとも述べている（近藤2000）。堂ヶ谷出土の腰刀も、I類の中でも、特にフクラがつかず、鋭い切先のものが認められることから、前者の機能が設定でき、A類、B類に分類した中で反りのあるものが一部で認められることから、後者の機能が設定できるのではないだろうか。いずれにしても大半の腰刀類が時代性を示す特徴を持っており、少なくとも、すべての腰刀が埋納のために製作されたという可能性は低いのではないかと考えられる。

補足の資料として、表3に棟画と刃面の長さをそれぞれ示した。その中で3mm以上刃面の小さいものが、いくつか認められる。図2-13、17がそれに該当する腰刀であるが、茎の中心線に比べて刀身の中心線が棟側にずれていることが分かる。形状から見ても他の腰刀と大きく相違する点は認められないことから、これらの腰刀は刀身の研磨によって、刃側の刀身が減じた

ものと考えられ、経塚に埋納される以前は実際に使用されていた可能性も指摘できる。他にも3mmほど差はないが、刃側が1mm～2mm少ないものが認められるが、刀身の表面が錆びているため、実際に研磨が行われていたかは観察によって判断するのは不可能である。また、刀身を曲げられているものも認められるため、なまぐらの腰刀が埋納された可能性もあるが、なまぐら刀以外にも埋納以前に実際に使用された腰刀も複数埋納された可能性はあり得ると考える。

4 まとめにかえて

堂ヶ谷経塚より出土した腰刀について、刀身の長さや切先の形状により分類を試みた。その結果、刃面が棟画に比べて狭いものが複数確認することができ、刀の使用による砥ぎ減りの可能性が指摘できることと、刀身の形状は機能上の差異である可能性が高いことを指摘した。このことは経塚の造営に係わった人々の存在を示す一つの手掛かりになり得ると考える。ただし、まだ資料の観察による推測の段階であるため、堂ヶ谷経塚以外の出土例を検討し、堂ヶ谷経塚出土の腰刀は実用品であったのか、埋納のために作られたものなのか、より詳細な資料の検討が必要である。また、撫画や斜画をもつ伝世品は知られていないため、他の短刀の出土例を集め、茎や画の形状の差異は、生産地などの地域差を表すものなのか、機能上の違いを表すものなのか探していきたい。

註

- 1 渡辺2009 「短刀の魅力」より加工転載

引用・参考文献

- 井鍋誉之 2010 『堂ヶ谷経塚・堂ヶ谷廃寺』 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 近藤好和 2000 「「刀」に関する一考察」『中世の武具の成立と武士』 吉川弘文館
- 渡辺妙子 2009 「短刀の魅力」『短刀の美—鉄の煌き』 佐野美術館
- 泉屋博古館 2008 『特別展 厳島神社の刀剣』

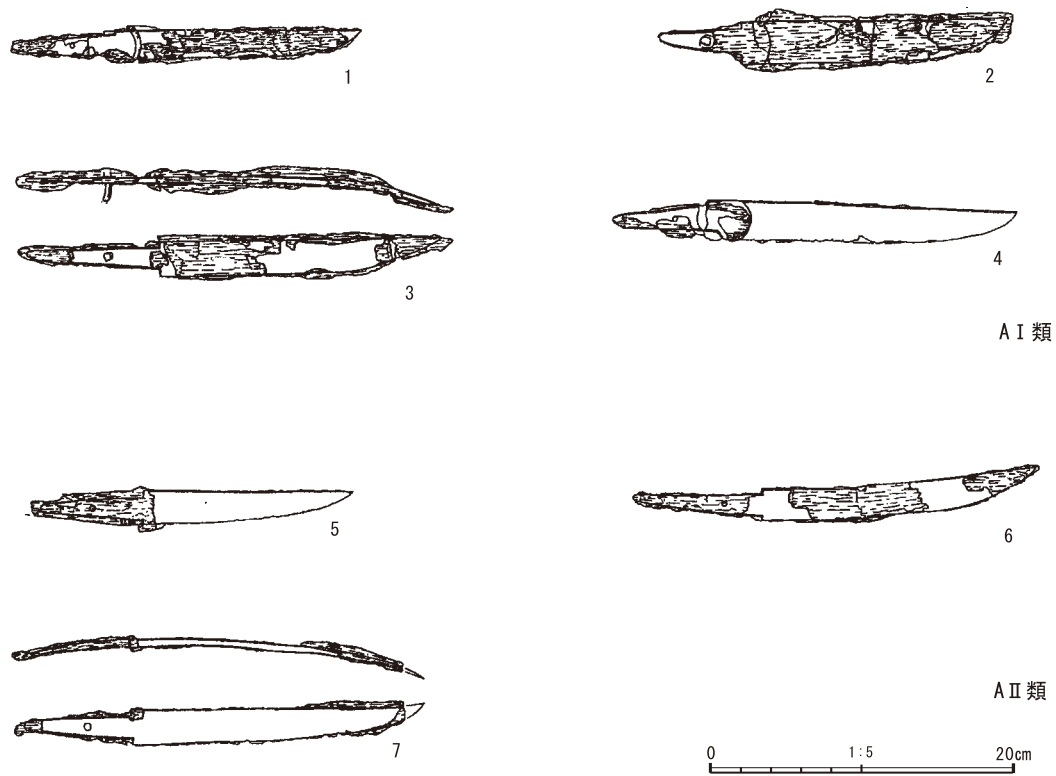


図1 腰刀（AI類、AII類）

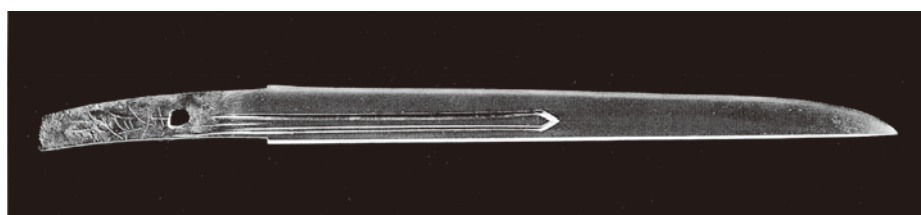


写真1 友成（平安時代末期）

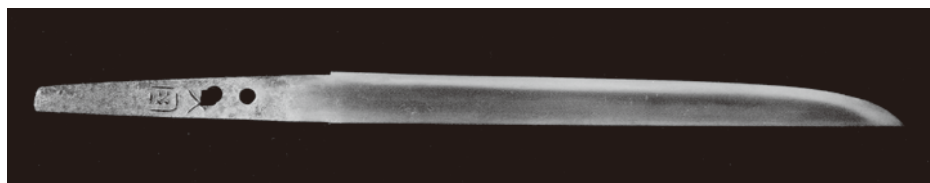


写真2 久国（鎌倉時代初期）

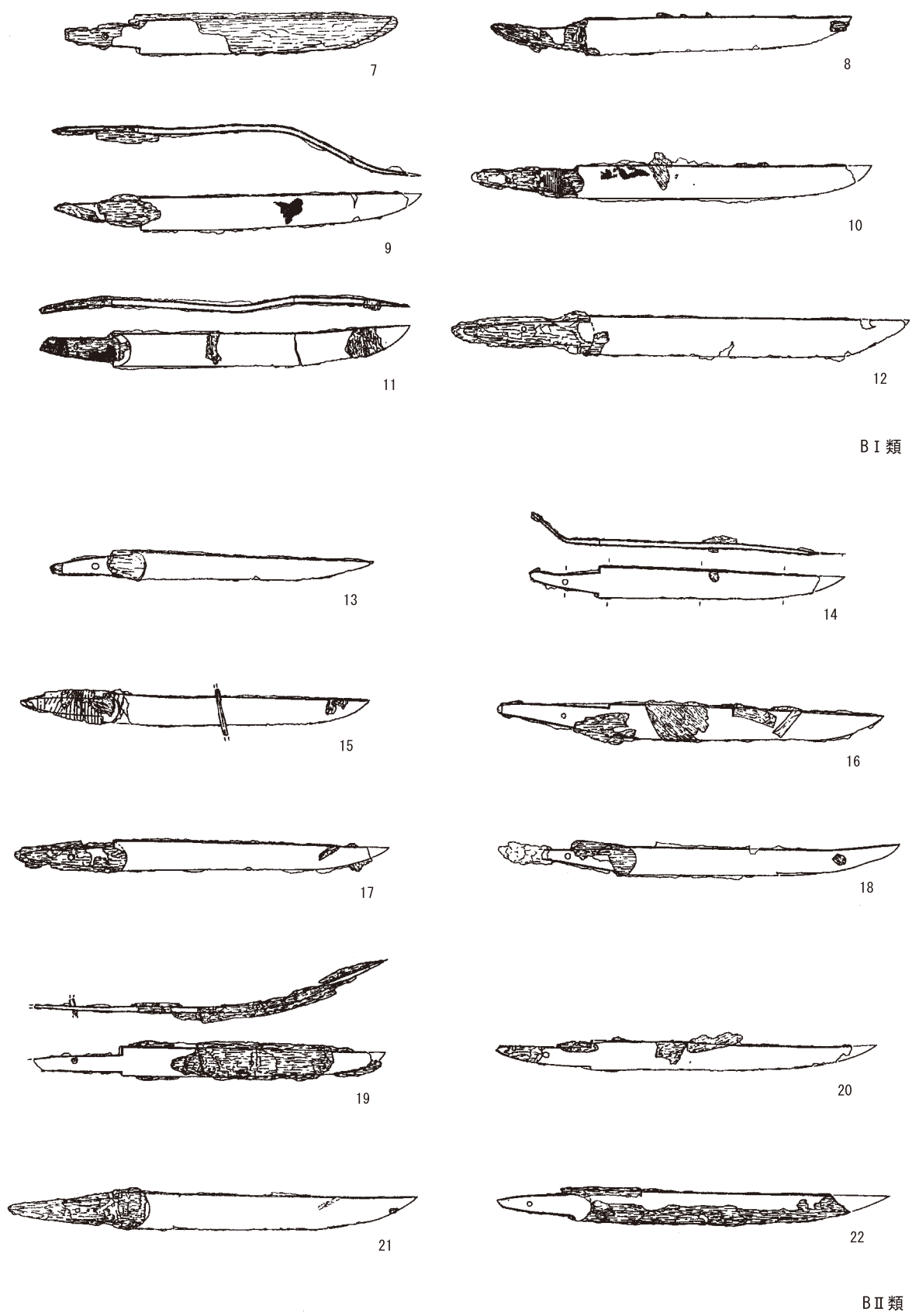


图1 腰刀 (BI類、BII類)